

1. 足立英彦と申します。報告の機会をお与えいただいたことに、心より感謝申し上げます。本日の報告テーマは、「倫理の可能性としての法：ラートブルフの自由論について」です。

我叫足立英彦。我衷心感謝這次給我報告的機會。我的報告題目是「法為倫理可能性：拉德布魯赫的自由論」。

2. 最初に、報告テーマについて簡単に説明します。次に、「倫理」について説明します。最後に、「法」について説明します。

首先我簡單地說明報告題目。接著再解釋倫理，最後則說明有關法。

3. この報告の分析対象は、ラートブルフが1914年に出版した『法哲学綱要』にある次の一文です。「法は倫理の可能性にすぎず、それゆえ非倫理の可能性にすぎない。」

這次報告的分析對象是拉德布魯赫在1914年出版的『法哲学綱要』裏的一文。「法僅是倫理的可能性，因此也是非倫理的可能性。」

4. 説明を簡単にするため、この文は、次のような意味であるとします。「法は倫理の可能性であり、かつ、非倫理の可能性である。」この主張を理解するためには、第一に、ラートブルフが考える倫理とは何なのかを明らかにしなければなりません。第二に、ラートブルフが考える法とは何なのかを明らかにし、さらに、その法はどのように倫理を可能にするのかを明らかにしなければなりません。

為了讓說明能更簡單點，這一文具有以下的意思。「法是倫理的可能性同時也是非倫理的可能性。」要理解這主張必須釐清以下兩件事。第一，拉德布魯赫所認為的倫理是什麼。第二，拉德布魯赫所認為的法是什麼，更進而究明那樣的法如何能成為倫理的可能。

5. ラートブルフは、「倫理」を明確には定義していませんが、前後の文脈に基づくと、この文における倫理は、意志が倫理的規範に一致していること、または従っていること、という意味であろうと思われます。この倫理的規範は、ラートブルフによれば、自由な意志に向けられたものです。すなわち、義務を負うのは自由な意志であるということです。このことは「自由がなければ規範もない」という彼の文によっても主張されています。また、規範は常に「妥当」します（有効です）。すなわち、ラートブルフの規範概念には、「妥当性」が含まれています。したがって、「妥当しない規範」（無効な規範）という表現はあり得ません。

拉德布魯赫並沒有對倫理下明確的定義，基於文章前後的脈絡，在這一文中的倫理被認為是，意志是與倫理的規範一致的，或者是遵循倫的規範。至於倫理的規範，根據拉德布魯赫，是指針對自由的意志。也就是說，負擔義務的是自由的意志。根據他所寫的：「沒有自由就沒有規範」也是這麼主張的。再者規範總是有效的。也就是說拉德布魯赫的規範概念裡含有「妥當性」。因此「不妥當的規範」（無效的規範）是不可能的。

6. では、「自由な意志」とは、どのようなものなのでしょう？ ラートブルフは次のように書いています。「各人は、自分だけを主体として、自由なものとして体験できる。他者はすべて対象であり、不自由なものとしてしか考えることができない。」もっと短

い文もあります。「私は自由だ。あなたは不自由だ。」

那麼「自由的意志」指的是什麼呢？拉德布魯赫如下寫著「每個人只有當他以自己為主體，以自由之身方能體驗。他人全部都是對象，只能當作是不自由之身。」另還有一較短的句子，「我是自由的，你是不自由的。」

7. 今まで述べたことをまとめますと、次のようになります。規範は、その名宛人の自由を前提とします。そして、個々人はそれぞれ、自分だけにとって自由です。これらのことから、次の帰結を導けます。すなわち、自分自身に対してのみ規範を定めることができる、言い換えれば、自分自身に対する規範のみが正当化可能であるということです。他者に対して規範を定めることは正当化できません。

我整理一下以上所報告的。即規範是以適用對象的自由為前提。每個人只有針對自己才是自由的。由此可得以下的結論。即只有針對自己本身才可訂定規範，換言之，只有針對自己本身所定的規範才可能正當化。

8. 次に、ラートブルフが考える「法」について説明します。彼によれば、法は他者に向けられる、すなわち、他者を義務づける「命令」です。他者は不自由な存在ですので、法は規範ではあり得ません。したがって、法は妥当せず、法を正当化することもできません。では、法は倫理的にまったく正当化できないのでしょうか？

接下來我來說明拉德布魯赫所思考的法。根據他而言，法是針對他者的，即對他人規定義務的命令。因他人是不自由的存在，故法不是規範。因此法不是妥當的，也不能把法正當化。那麼法在倫理上完全沒辦法正當化嗎？

9. ラートブルフは次のように主張します。「法は、個々人に権利を与えることによるのみ、倫理に奉仕することができる。」倫理とは、意志が倫理的規範に従っていることを意味しますので、この文は、「法は、意志による義務履行を可能にする」という意味であるはずですが、では、権利はどのようにして義務履行を可能にするのでしょうか。

拉德布魯赫作如下的主張。「法只有藉著賦予個人權利，才可對倫理貢獻。」所謂倫理意味著意志遵從倫理的規範，這一文應該是意味著「法使憑意志履行義務成為可能」。那麼權利如何使履行義務成為可能呢？

10. 残念ながら、ここで言及している権利が、どのような種類のものであるかについてラートブルフは説明していません。しかし彼は、権利の例として所有権を挙げています。したがって、彼は、倫理的な行為（倫理的規範に従った行為）を妨害しないことを求める権利、すなわち防御権・妨害排除請求権を念頭に置いていると推測できます。

可惜的是我在此所提及的權利，究竟指的是哪種權利呢？拉德布魯赫並沒有說明。可是他曾舉所有權作為權利的例子過。因此可以推測他認為要求倫理的行為（遵從倫理規範的行為）不受妨害的權利，也就是防禦權・妨害排除請求權。

11. 妨害しないことを求める権利は、否定的な行為（不作為）を求める権利です。この権利には、そのような妨害の禁止（不作為義務）が対応します。

要求不受妨害的權利，就是要求否定的行為（不作為）的權利。這樣的權利對應著禁止

妨害（不作為義務）。

12. 例を用いて説明しましょう。ある人（ p とします）は、「私は散歩に行かなければならない」という規範を定めたいとします。では、他の人（ q ）が、 p が散歩をすることを妨害すると仮定します。例えば、警察が理由なく p を逮捕する場合を想定すればよいでしょう。または、 q は、 p が散歩をしないこと妨害する、すなわち、散歩をすることを強制すると仮定します。例えば、 p は刑務所の囚人で、刑務所長 q が、刑務所の中庭で散歩をすることを p に強制する場合を想定してください。いずれの場合においても、 p は自由ではありません。なぜならば、 p は、散歩をすることとしないことの間で選択をする、ということができないからです。規範は自由な意志を名宛人としますので、 p は、「私は散歩をしなければならない」という規範を定めることができません。

讓我舉個例說明。有個人（假設為 p ）自己想定個規範「我必須要去散步」。那麼假設（ q ）妨害 p 的散步。例如警察毫無理由地逮捕了 p ，或者 q 妨害 p 不散步，也就是說假設強制散步。例如假設 p 是監獄的囚犯，監獄長的 q 強迫 p 到監獄的中庭散步。不論是哪種情況， p 不是自由的。因為 p 沒辦法在散步與不散步之間做選擇。因規範是以有自由意志作為適用對象， p 沒辦法對自己規定我必需散步的規範。

13. したがって、ある行為（ A とします）を妨害しないことを求める p の権利は、 p が自分に対して「 p は A をしなければならない」という規範を定めるための必要条件である、ということになります。言い換えれば、そのような権利がなければ、規範を定めることができないということです。そして、もし p がある規範を定め、その後、 p がその規範に従ったならば、 p は倫理的であり、 p がその規範に従わなければ、 p は非倫理的であるという評価を受けることになります。逆に、もし p が規範を定めなければ、または定めることができなければ、倫理的・非倫理的という評価を下すことはできません。

因此 p 要求不妨害某種行為（假設為 A ）的權利是， p 對自己規定「 p 必需做 A 」的規範的必要條件。換言之，沒有這樣的權利，是沒辦法規定規範的。而且如果 p 規定了個規範， p 如果遵從該規範的話， p 是倫理的。相反的，若是 p 沒規定規範，或是無法規定規範，那麼就沒辦法下倫理的・非倫理的評價。

14. 以上の説明から次のように言うことができます。法がなければ、規範を定めることができない。規範がなければ、倫理的な評価もできない。したがって、ラートブルフが言うように、権利＝法は、倫理の可能性であり、非倫理の可能性でもある、ということになります。また、先ほども述べたように、法は妥当しませんが、今述べたような意味で、間接的にですが、法を倫理的に正当化することは可能である、ということも言えるでしょう。

以上の説明可歸結如下：如果沒有法，就無法規定規範。如果沒有規範，也就無法做倫理的評價。因此就如同拉德布魯赫所說的，權利＝法是，倫理的可能性，也是非倫理的可能性。再者如先前所述的，法是不妥當的，但是雖是間接地，也可說法是可能成為倫

理上の正當性。

15. ご静聴、ありがとうございました。今行った口頭での報告原稿（日文・中文）が必要な方は、遠慮なくお申し出ください。

非常感謝大家靜聽。我今天所做的口頭報告的原稿（日文・中文）若有需要，請不要客氣，務必讓我知道。